第Ⅶ章　まとめ

第１節　清武上猪ノ原遺跡第５地区の立地環境について（第２図・第38図）

清武上猪ノ原遺跡第５地区では旧石器時代から中世までの幅広い遺構・遺物が確認された。特に旧石器時代のナイフ形石器文化期から縄文時代早期まではほとんど途切れることなく、ここで生活していた人々の痕跡をみることができた。そこで改めてその立地環境についてここでまとめてみようと思う。

本調査区は清武上猪ノ原遺跡の東端に位置しており、船引原台地の東側端部にもあたる。ここからさらに東側はシラス台地特有の急斜面となっている。この斜面の中腹には現在も豊富な水量を誇る湧水地点が存在しており、地元の人々が生活用水としてその湧水を使用している。本調査区の北側にはそこへたどり着ける道も存在する。また斜面下には低地が広がっており、本調査区からは特に南東方向へは見晴らしがよく、清武川の流れや日向灘までも見渡せる。近接する清武川の河床では石器製作に使用することが可能な砂岩礫を中心とする石材も採集することができる。また礫群や集石遺構の構成礫についても隣接する五反畑遺跡近くの斜面で見られた礫層や清武川で手に入れることができたであろう。

このような地理的条件が旧石器時代の遊動生活や縄文時代の初期定住生活において非常に適した地点であったと考えられ、その結果当該期の多くの遺構と遺物が本調査区に残されたと考えられる。

第２節　旧石器時代の調査成果

１．ナイフ形石器文化Ⅰ・Ⅱ期の編年的位置付け

本調査区の南側では霧島小林軽石を含むローム層下位の暗褐色ローム層（基本土層Ｘ層）を中心としてナイフ形石器文化Ⅰ期の石器群が検出され、無遺物層を挟んでシラス直上のローム層（基本土層Ⅻ層）を中心とするナイフ形石器文化Ⅱ期の石器群が検出された。船引地区遺跡群での唯一の明瞭なナイフ形石器文化期の重層遺跡である。ここではこの２枚の文化層の編年的位置付けを行う。

ナイフ形石器文化Ⅱ期では二側縁加工のナイフ形石器とスクレイパーが主体となって出土している。二側縁加工のナイフ形石器は既存の分類に当てはめると狸谷型ナイフ形石器と台形様石器である。また剥片尖頭器に類するナイフ形石器や製品類は出土していないが瀬戸内技法関連の資料もわずかに見られることも特徴的である。このような石器群は宮崎10段階編年において第５段階[1)]に位置付けられる。南九州で狸谷型ナイフ形石器を製作した痕跡が見られる遺跡としては宮崎市佐土原町の長薗原遺跡[2)]や鹿児島県の箕作遺跡[3)]等が挙げられる。これらの出土層位はシラス台地上の遺跡である箕作遺跡ではシラスの直上の層から、シラス台地ではない長薗原遺跡では霧島小林軽石を含むローム層の下位からアワオコシを含む層の上位で検出されている。

ナイフ形石器文化Ⅱ期では調査区全体に多くの接合関係のある多数の礫群が検出されるとともに、大量の接合資料と敲石が出土している。黒曜石製石器の産地分析によると日東産のものが多数見られるが、大振りの石核は全く出土していない。また本調査区と隣接しており同様の石器群の分布が連続する清武上猪ノ原遺跡第４地区では、五ヶ瀬川産の流紋岩製の錐状石器が１点だけ出土している。これらのことから当時の五ヶ瀬川流域と大口盆地周辺の間を移動する集団がその際に本調査区を頻繁に訪れ、石器製作を行ったと考えられる。なおここでは日東産の黒曜石については概ね素材剥片の状態で搬入して二次加工を行い、遺跡近傍の石材については礫素材で搬入して、一次加工から二次加工までを行っていたことが接合資料から想定される。

また今回４基の礫群内の炭化物について放射性炭素年代測定を行い24710±140BP～23410±120BPという年代が得られている。これらは他地域の狸谷型ナイフ形石器を中心とする石器群との年代対比に有効な成果であろう。

ナイフ形石器文化Ⅰ期では、平面形が三角形となる二側縁加工の小形のナイフ形石器、縦長剥片を素材とする基部加工・部分加工のナイフ形石器、台形石器が主体として出土している。ナイフ形石器文化Ⅰ期は調査区の南西部に中心が認められⅡ期に比べると分布範囲が狭いものの、やはり多くの接合資料が見られることからここで積極的に石器製作を行っていることがわかる。同様の石器群としては宮崎市高岡町の小田元第２遺跡の第Ⅲ文化層[4)]や同市佐土原町の南学原第１遺跡[5)]などが挙げられ、霧島小林軽石を含むローム層の下位より検出されている。これらの石器群はナイフ形石器文化の終末期に位置付けられ、宮崎10段階編年の第７段階[6)]にあたる資料と考えられる。

２．細石刃文化期の遺物について

本調査区では縄文早期から草創期の遺物包含層中より細石刃・細石刃核が多数出土している。しかしこのような出土状況のため、それ以外の細石刃文化期の遺物を縄文時代の資料と分類することは難しく、残念ながらそれらの報告はかなわなかった。しかし、清武上猪ノ原遺跡第４地区でも見られた不透明で不純物が混入する桑ノ木津留産黒曜石製の資料(桑ノ木津留産黒曜石Ｂ類)については本調査区でも細石刃文化期のものと考えられる[7)]。

細石刃及び細石刃核の使用石材をみると桑ノ木津留産黒曜石が最も多いがそれ以外の資料も一定量出土しており、平面分布を見ると両者が分かれる傾向にある。このことは時期差を示す可能性もあり注目されるだろう。また原産地推定分析から腰岳産黒曜石製遺物(180・201)が混入していたという結果が得られたことも重要である。

第３節　縄文時代草創期の調査成果

１．竪穴住居跡の構造と配置について

本調査区では縄文草創期の竪穴住居跡が14棟も検出された。これらの竪穴住居跡の構造としては床面の掘り込みの外側に柱穴がめぐること、床面の中央部付近に炉跡が設けられていること、楕円形のものが多くその長軸が概ね東西方向に向いているものが多いことなどが挙げられる。

竪穴住居跡の平面形状や長軸方向については、冬時期に西から強い風が吹く現象が影響していると考えられる。現在も本遺跡周辺地域では、この強い西風を利用して大根棚による漬物用の大根干しが行われている。今回検出された竪穴住居跡群は、冬場に吹くこの風の影響を少しでも避けるために西から東にかけて緩やかに下る斜面上に造られていると考えられる。また竪穴住居跡の多くが楕円形プランで、その長軸が概ね北西から南東方向に設定されていることもこの西風を避けることを意識している裏付けとなろう。これらのことから竪穴住居跡の入り口は東側に設定されていた可能性が高いと想定される。

２．集落内での空間利用について(第106・252・253図)

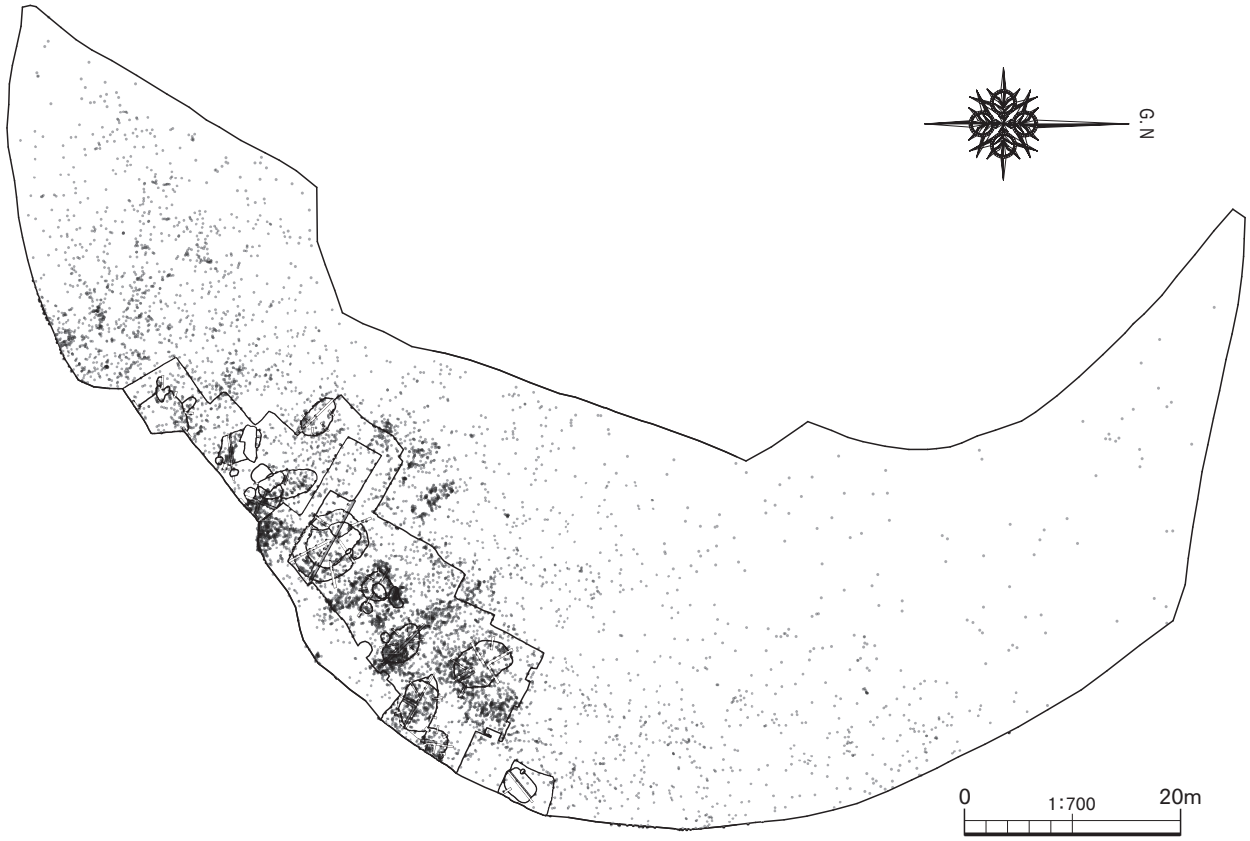
本調査区から出土した重要な遺物として九州で初の出土事例となった矢柄研磨器が挙げられる。これは本州島を中心に出土するいわゆる有溝砥石の一種である。この資料はかつて２個対となって矢柄を整形するために使用されたものと考えられていたもの[8)]だが、現在は骨角器の研磨などにも使用されたと想定されている[9)]。本調査区から出土した資料の多くが石英質砂岩製で、硬質石材の研磨には耐えられないため、やはり有機質のものを成形した工具であることは間違いないだろう。

そこで本調査区における矢柄研磨器８点が出土した地点を見ると、全て竪穴住居跡群の南西部で発見されている。その周囲からは槍先形尖頭器や石鏃も多く出土しており、さらに石鏃の未製品や欠損品、穴を開けるための石錐もこの辺りに分布が集中している(第106図)。次に縄文草創期の遺物包含層の土器と石器の出土状況を見てみると、居住域である竪穴住居跡周辺には土器の分布が多く見られ(第252図)、矢柄研磨器周辺には石器類の分布が目立つ傾向にある(第253図)。このような調査区全体の遺物の出土状況から、本集落内においては竪穴住居跡群から少し離れた調査区の南西部付近に道具製作の空間が存在したということが考えられる。

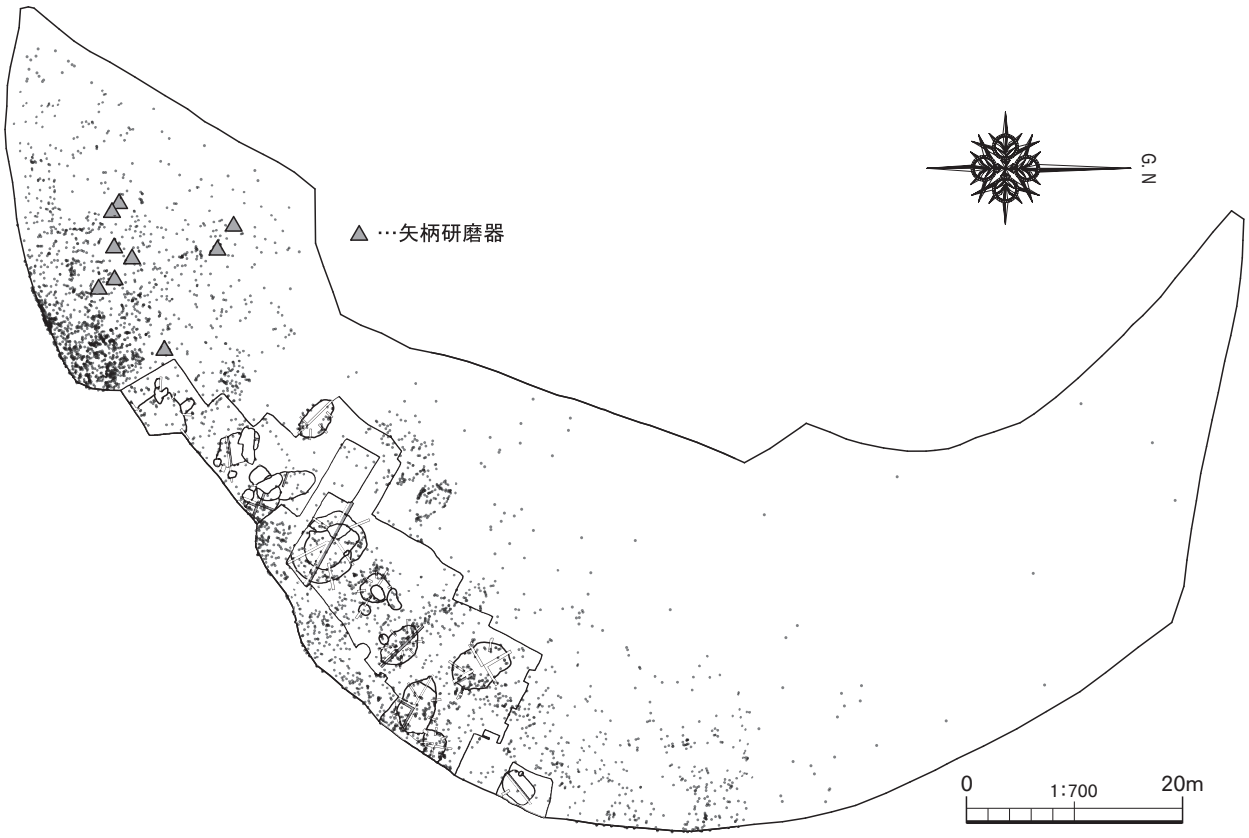
３．竪穴住居跡の出土遺物と同時性について(第16表)

本調査区からは隆帯文土器が出土した14棟の竪穴住居跡が検出されており、草創期の集落跡としては全国でも最多の検出数となっている。これらは切り合い関係にあるものが多く、７～９号住居跡の３棟の切り合い関係から最低でも３時期の住居の変遷が考えられる。そのほかにも10・11号住居跡の２棟に切り合いや非常に近接して同時に存在することが困難と考えられる３号・４号住居跡の存在があり、それ以上の変遷が存在した可能性が高い。この多くの切り合い関係から14棟の竪穴住居が全て同時に共存したものではなく、一定期間に存続した集落跡ということができる。竪穴住居から検出された炭化物の放射性炭素年代測定結果も11720±40BP～11330±60BPと幅のある年代を示していることもその裏付けとなるだろう。課題としては竪穴住居間の同時性を検討することである。そこで遺構内の出土土器に注目してみる。

時期の指標となる竪穴住居跡から出土した土器を見ると、つまみによる隆帯文を施文する土器(隆帯文1c類・２類・３類)だけが出土した５号・６号・８号・13号住居跡とつまみによる隆帯文土器と肥厚帯を持つ土器(隆帯文４類)が出土した２号・３号・４号・７号・９号・10号・11号・12号・14号住居跡に分かれる。そこで改めて



第252図　縄文時代草創期竪穴住居跡配置及び包含層出土土器分布図（S＝1/700）



第253図　縄文時代草創期竪穴住居跡配置及び包含層出土石器分布図（S＝1/700）

それらの切り合い関係を確認すると前者のつまみによる隆帯文土器だけが出土した住居跡については切り合い関係が無く、全て共存が可能である。しかし両方の隆帯文土器が出土した住居跡については3号•4号と7号•9号、10号・11号は各々共存できない位置関係にある。つまり最低でも後者の住居跡も2時期に分かれることが確実となる。放射性炭素年代測定結果を用いてそれらの細分案を検討すると7号・10号住居跡は年代的にもほぼ同時期であり、それらに切られている9号・11号住居跡とは時期差が存在することとなる。また2号・14号住居跡の測定結果を見ると7号・10号住居跡よりも新しい年代が得られている。これらのことから本調査区では最低でも4時期以上の竪穴住居の変遷が想定され、1度に存在した竪穴住居については2棟から4棟という数字が考えられる。

近年、全国的に本調査区のような草創期の竪穴住居跡が複数検出された遺跡が相次いで発見されている。その共通性として重複する遺構が多いこと、竪穴住居の構造にも共通性があることなどが挙げられており、九州の草創期後半集落跡は日本列島全体の同じ枠組みの中で捉えられると指摘されている[10]。

4．出土土器について（第96図）

本調査区において主体となる隆帯文土器は2種類あり、それらは第Ⅲ章第3節の分類では隆帯文2類と4類にあたるものである。遺物包含層中のそれらの隆帯文土器の出土状況をみると隆帯文2類は調査区の中央よりやや南東側に隆帯文1c類・3類とともに分布が集中する。一方隆帯文4類についてはその西側から南西付近にかけて分布が集中する様子が見られ、両者の分布の中心は重ならない（第96図）。

隆帯文土器1c類・2類・3類の多くはつまみによる隆帯を貼り付けるものであり、隆帯の間隔や数量に差はあるものの基本的には同じ手法のものであるため時期差はほとんどないものと考えられる。しかし、隆帯文4類は肥厚帯を持つという特徴から前者とは明らかに形態が異なっている。竪穴住居跡からの土器の出土状況については前述のとおり、前者だけの土器が出土するものと両者が出土するものとが確認されている。それらが切り合い関係にあるものが8号住居跡と7号・9号住居跡である。

8号住居跡からは隆帯文2類と爪形文1類だけが出土しており、7号住居跡は隆帯文1c類•2類•4類が出土し、9号住居跡からは隆帯文4類だけが出土している。これらの切り合い関係は土層観察から（旧）8号→9号→7号（新）となっており、隆帯文2類だけが出土する8号住居跡よりも隆帯文4類が伴う7号・9号住居跡の方が新しいことから、隆帯文2類から4類への変遷が窺える。

この他に注目される成果として本調査区からは円形の刺突文を施す土器（696～706）が出土している。これらは長崎県佐世保市泉福寺洞穴の5層から出土しているものと類似している[11]。数量が少なく分布状況から読み取ることが難しいが本遺跡の主体となる隆帯文土器に伴うものと考えられる。隆帯文土器はその強い個性から他地域との時間的な比較が難しいとされてきたが、この円形の刺突文を施す土器の出土例はその問題を解決するための重要な検討材料となり得る。

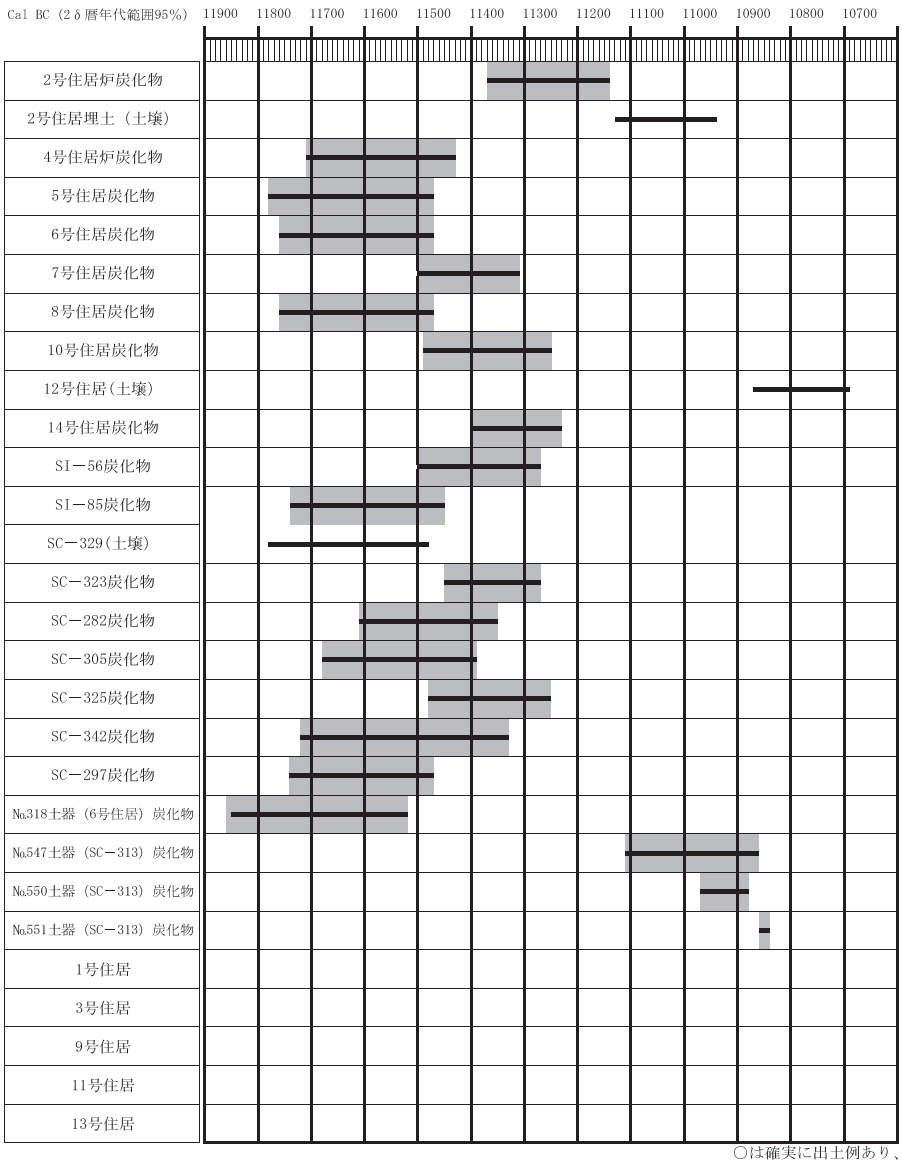
また数量は少ないものの、本調査区からは隆線文土器、指頭押圧による隆帯文土器（隆帯文1a類）、薄手の無文土器なども出土している。これらはこれまでの研究成果[12]から前二者は隆帯文2類の前段階に位置付けられる土器であり、本調査区においても南西部にまとまっていて隆帯文2類とは分布が離れている。また薄手無文土器は今回の炭素年代測定結果から隆帯文土器に後出するものと考えられ、調査区の中央部よりやや北東側で分布が多く、周辺からはわずかだが岩本式も出土している。このように本調査区から出土した草創期の土器には時期差があるものと考えられ、集落規模の変化が各段階であったと考えられる。

5．出土石器について

本調査区において縄文草創期の遺物包含層及び遺構から出土した石器として細石刃核・石鏃・尖頭器・石斧・矢柄研磨器・石錐・スクレイパー・楔形石器・磨石・敲石・石皿がある。

細石刃核については貯蔵穴と考えられるSC－329から出土しており、頁岩製剥片を素材としてその木口部分に作業面を設定するもの（512）で、細石刃核の中では新しい特徴を持つものと考えられている[13]。本遺構埋土からは土器片4点と石鏃4点、石錐1点などが共に出土している。土器は小片ばかりで分類が困難だが1点（511）は爪形文土器1類にあたると思われ、石鏃は桑ノ木津留産黒曜石製のD類（513）と安山岩製のF類（514・515）が出土している。特に512と513は床面近くから出土しており、本遺構に間違いなく伴うものと考えられる。

矢柄研磨器は前述のとおり、本調査区においては道具の製作空間を示す資料であり、前述の円形の刺突文を施す土器とともに、他地域との時間的な並行関係を捉える上で重要な検討材料となり得るものである。



	AMS補正年代	出土土器 隆帯2類	出土土器 隆帯3類	出土土器 隆帯4類	出土土器 爪形1類	出土石器（製品類） 石鏃	出土石器（製品類） その他
2号住居炉炭化物	11330±60BP	○	△	○	○	CDE	スクレイパー・石斧・敲石・磨石・石皿
2号住居埋土（土壌）	11065±40BP						
4号住居炉炭化物	11660±40BP	○	△	○	―	D	スクレイパー・敲石
5号住居炭化物	11720±40BP	○	△	―	○	D	スクレイパー
6号住居炭化物	11710±40BP	○	△	―	―	CD	磨石
7号住居炭化物	11520±40BP	○	△	○	○	D	スクレイパー・敲石・磨石・石皿
8号住居炭化物	11710±40BP	○	―	―	○	D	スクレイパー・敲石・石皿
10号住居炭化物	11470±60BP	○	―	○	○	―	細石刃核・スクレイパー・敲石・石皿
12号住居（土壌）	10660±40BP	△	△	○	―	―	スクレイパー・石皿
14号住居炭化物	11400±40BP	○	○	○	○	ACD EF	尖頭器・石錐・スクレイパー・敲石
SI－56炭化物	11480±60BP	―				―	―
SI－85炭化物	11690±40BP	―				―	―
SC－329（土壌）	11730±40BP	―	―	―	△	DF	細石刃核・石錐
SC－323炭化物	11450±40BP	図化に耐えない				D	スクレイパー・敲石
SC－282炭化物	11580±40BP	―	―	○	―	―	敲石
SC－305炭化物	11630±40BP	○	△	―	―	―	―
SC－325炭化物	11480±60BP	―	―	○	―	―	―
SC－342炭化物	11610±70BP	―	―	○	―	―	―
SC－297炭化物	11705±45BP	図化に耐えない				―	石皿
№318土器（6号住居）炭化物	11810±60BP	○	―				
№547土器（SC－313）炭化物	10920±50BP	無紋				―	敲石
№550土器（SC－313）炭化物	10900±40BP						
№551土器（SC－313）炭化物	10840±60BP						
1号住居	―	図化に耐えない				D	石錐
3号住居	―	○	△	○	―	―	敲石・磨石
9号住居	―	―	△	○	―	CD	敲石
11号住居	―	△	○	○	―	―	石斧
13号住居	―	○	―	―	―	―	スクレイパー・石斧・敲石

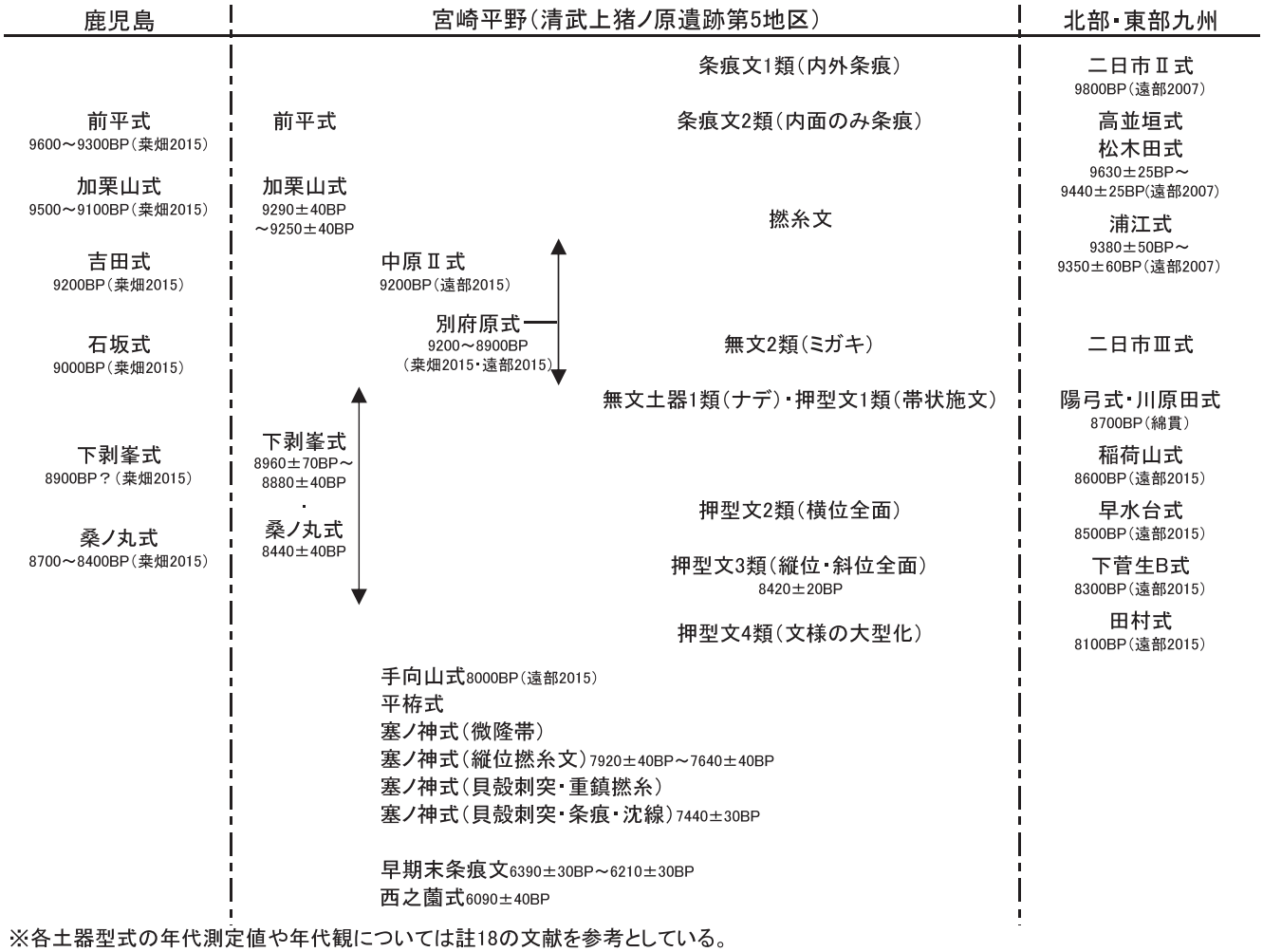
○は確実に出土例あり、△は残存状況が悪く分類に問題が残る、―は出土例なし。

第16表　清武上猪ノ原遺跡第５地区縄文草創期竪穴住居跡内遺物一覧及び放射性炭素年代測定値

尖頭器は素材剥片の形状を残すものが比較的多い。局部磨製の 835 は使用石材から石斧片の転用品の可能性も考えられる。832 は平基のもので、鹿児島県西之表市鬼ヶ野遺跡の資料の類例となる[14]。839 は薄手幅広の尖頭器の先端部片であり、清武上猪ノ原遺跡第２地区のサヌカイト製の両面加工尖頭器の類例となる[15]。

石鏃については草創期の石鏃として従来から注目される正三角形鏃・二等辺三角形鏃があり、これらの使用石材は桑ノ木津留産黒曜石が目立ち、また素材剥片の形状を残すものが多いことも特徴的である。この他に注目すべき石鏃としてＦ類と分類された資料がある。これはやや大振りで脚部の先端が屈曲して尖るという特徴を持ち、特に安山岩が多用されている。14 号住居跡からもまとまって出土しており、今後周辺地域の縄文草創期の石鏃として指標となる資料である[16]。

本調査区では安山岩製の石器が多く見られることも特徴的であり、前述の石鏃Ｆ類のほか尖頭器・石錐・スクレイパーにも多く用いられている。剥片類まで含めると 350 点以上で 700g 以上はあり、船引地区遺跡群でも本調査区ほど多くの安山岩が出土した遺跡は他にない。その一部について産地同定を行ったところ、多久産のものが見られることがわかった。南九州では草創期の段階で西北九州産黒曜石の使用が少なくなるという指摘があり[17]、本調査区でも草創期の遺物包含層からはあまり西北九州産黒曜石は出土していないようである。そのような状況の中、同地域の安山岩は多用されていた可能性があるということはどのような意味を持つのか興味深い。



※各土器型式の年代測定値や年代観については註18の文献を参考としている。
　出典記載のないものは船引地区遺跡群における土器付着炭化物の炭素年代測定値である。

第254図　清武上猪ノ原遺跡第５地区出土早期土器編年図

第４節　縄文時代早期の調査成果

１．土器の出土量と遺構の数について

本調査区では縄文早期前葉から末葉までの多くの遺物が出土している。分類可能であった土器の中で特に出土点数の多いものに注目してみると、別府原式土器が 763 点、下剥峯式土器が 691 点、押型文土器 2 類が 1039 点、3・4 類が 1101 点、塞ノ神式土器が 3522 点（縦位撚糸文 1360 点・貝殻施文 2162 点）という結果となっている。このことから本調査区では早期中葉から後葉にかけての遺物が最も多いということとなる。

次に検出された遺構のうち放射性炭素年代測定を行ったもの（集石遺構 28 基、炉穴 19 基）を見てみると 9000BP より古い集石遺構が 1 基、9000 ～ 8500BP のものは集石遺構が 13 基で炉穴は 3 基、8490 ～ 8000BP のものは集石遺構 13 基で炉穴は 16 基、8000BP より新しいものは集石遺構 1 基という結果となっている。この結果からは本調査区で遺構が積極的に構築された年代は 9000 ～ 8000BP の間である可能性が高い。また近年の土器付着炭化物の放射性炭素年代測定結果に基づく研究によるとこの時期の土器型式は別府原式・下剥峯式・桑ノ丸式・押型文土器類が該当するようで、遺物量の多さとも矛盾はない。

しかし、早期後葉の塞ノ神式土器の段階以降になると今回の年代測定結果からは遺構の構築数が激減しているようで、遺物量は前段階と変わらないのに遺構が少なくなるという状況が想定される。その背景にはこの頃が縄文海進時のピーク直前にあたり、自然環境の変化が起こったことによって当時の人々が生活スタイルを変化させたためか、本調査地の土地利用方法に変化があったためと考えられよう。

２．出土土器について（第 254 図）

遺物包含層である基本土層Ⅴ層からⅧ層の上部にかけては縄文早期全般の様々な土器が出土しており、遺物分布図をみると調査区全体を覆いつくすようである。しかし、いくつかの土器についてはその分布状況には偏りが見られる。特徴的な分布状況がとらえることができた土器様式について紹介する。

前平式土器は調査区中央よりやや北東側に分布が集中する。別府原式土器は調査区全体に広がっているが、その中でも北側に多く見られる。一方で下剥峯式土器や桑ノ丸式土器は調査区の南側の方に分布が目立っている。押型文土器２類と３・４類を見てみると調査区の中央よりやや南側では両者の分布が重なっているが、そこから南側では押型文２類が、北側では３・４類の分布が目立つ。調査区北側の谷地形となっている範囲には早期の前葉から中葉の土器がほとんど見られず、塞ノ神式土器ばかりが出土している。条痕文土器１類は調査区中央より東側に、撚糸文土器は調査区中央よりやや南東側に見られる。

これらのことから早期の前葉では調査区の北側が生活空間の主体であった可能性が窺える。また下剥峯式土器と桑ノ丸式土器と押型文土器２類は分布が重なるため、これらには相関関係があるかもしれない。宮崎平野部において押型文土器と貝殻円筒形土器の共伴関係を検討する場合には、単純に同一層から出土しているということだけでなく、各調査地点で土器の平面分布状況も観察する必要があるだろう。

本調査区からは南九州で一般的に見られる貝殻円筒形土器群に加え、船引地区遺跡群ではこれまであまり見られなかった早期前葉にあたると考えられる条痕文土器・無文土器類が一定量出土しており、また押型文土器も古い特徴とされる帯状施文のもの（押型文土器１類）がみられることが特徴として挙げられる。現在のところ、これらは南九州では外来系のものと捉えられている資料で、在地の土器との並行関係や年代観が議論されている。それらが一定量出土したことはその議論を深めることができる重要な成果であると言えよう。明確な層位的調査成果が得られていないため、近年の放射性炭素年代測定結果に基づいた年代観を軸に本調査区で出土した早期の土器の変遷案[18]を提示する（第 254 図）。この図に異論があることは承知の上で、今後本調査区の成果を踏まえた様々な議論が進められていくことを期待する。

３．桑ノ木津留産黒曜石製石器の分布について（第 174・217 図）

縄文早期の遺物包含層の石器の分布状況を見ると、調査区の中央より東側から北東側の空間に桑ノ木津留産黒曜石の分布が集中する様子が見られる（第 217 図）。その辺りの土器の分布を確認すると押型文土器も出土しているが、特に前平式土器や別府原式土器の分布が集中している（第 174 図）。桑ノ木津留産黒曜石は石鏃１類や石鏃５類の中でも小型品への使用が目立つ。これらのことから本調査区では早期前葉の段階に桑ノ木津留産黒曜石を使用して小型の石鏃を作成していたものと考えられる。なお、船引地区遺跡群のこれまでの調査成果からも桑ノ木津留産黒曜石は主に早期前葉から中葉にかけて使用された痕跡が見られており[19]、本調査区の様相もそのことと矛盾しない。

もう一つ同じ空間に分布が目立つものとしては石鏃の未製品や欠損品が挙げられる。このことはこの辺りで積極的に石鏃の製作が行われていたことを示していると考えられる。また、草創期の調査で道具の製作空間と想定された調査区南東側においてもそれらの分布が目立つように見える。こちらについては草創期から引き続き早期の段階になっても道具の製作が行われていた可能性もあるが、単純に草創期の遺物が早期の遺物包含層に混在してしまった結果とも捉えられる。本調査区における確実な早期前葉段階での石鏃の製作空間については桑ノ木津留産黒曜石製石器が多く見られる調査区中央より東側から北東側の付近にあったと想定される。

第５節　古代の調査成果

本調査区で検出された掘立柱建物跡は隣接する清武上猪ノ原遺跡第４地区にも広がり、陸橋を持つ溝状遺構 SE－2 によって区画されている。いくつかの掘立柱建物は切り合い関係にあり、また第４地区では少なくとも３回の建て替えが行われている建物も見られることから、一定期間集落が営まれていたと考えられる。この両調査区から出土した特徴的な遺物として円盤状高台付土師器坏や内黒の黒色土器、緑釉陶器が挙げられる[20]。

次に本調査区の南西方向に直線距離で約 200m、高低差は約 27m 離れている五反畑遺跡Ａ地区を見てみると、水田跡に導水したと考えられる溝状遺構が検出されており、その導水路を「ゴミ捨て場」とした状況が確認されている。この「ゴミ捨て場」からは円盤状高台付土師器坏や本県でまだ３遺跡でしか見つかっていない長沙窯瓷の黄釉水注片をはじめ内黒の黒色土器や墨書土器、緑釉陶器も出土している。この他に五反畑遺跡Ａ地区からは掘

立柱建物跡や須恵器・土師器・緑釉陶器の土器集積遺構、墨書土器が副葬された土坑墓なども検出されており、9 世紀代に営まれた集落跡と報告されている[21]。

この 3 つの調査区から出土した土師器の形態、法量は類似しており、また出土遺物にも共通性があることから 9 世紀から 10 世紀にかけて同時に営まれた集落空間といえるだろう。清武上猪ノ原遺跡第 4・5 地区は船引神社を見下ろす高台にあって、清武川や岡川の水運を掌握できるような立地にある。また五反畑遺跡 A 地区で検出された掘立柱建物跡より清武上猪ノ原遺跡第 4・5 地区の方が大規模であることを考慮すると、こちらの方が集落の本体であり、長沙窯瓷を持ち得るような有力者の居館が存在した可能性が指摘されている[22]。

船引地区遺跡群の古代の集落跡としては白ヶ野第 3 遺跡で竪穴住居跡が 3 基検出されている[23]。また清武上猪ノ原遺跡第 1 地区でも切り合い関係のある掘立柱建物跡群が検出されている[24]が、これらは第 4・5 地区の建物よりは小規模である。出土遺物をみても両遺跡ともに貿易陶磁や緑釉陶器等は見られない。船引原台地上では古代になると一時的に複数の集落跡が形成されているが、その中でも特に本調査区付近がその中心であったということが推察される。

【註】

1）宮崎県旧石器文化談話会 2005 「宮崎県下の旧石器遺跡概観」『旧石器考古学』第 66 号 旧石器文化談話会
2）宮崎県埋蔵文化財センター 2002 『長薗原遺跡』宮崎県埋蔵文化財センター調査報告書第 57 集
3）金峰町教育委員会 2004 『箕作遺跡』金峰町調査報告書第 18 集
4）高岡町教育委員会 2003 『小田元第 2 遺跡』高岡町文化財調査報告書第 29 集
5）宮崎県埋蔵文化財センター 2002 『南学原第 1・第 2 遺跡』宮崎県埋蔵文化財センター調査報告書第 50 集
6）註 1 に同じ
7）宮崎市教育委員会 2012 『清武上猪ノ原遺跡－ 4 －』宮崎市教育委員会文化財調査報告書第 83 集
8）山内清男 1968 「矢柄研磨器について」『日本民族と南方文化』 平凡社
9）宮下健司 1978 「「矢柄研磨器」の再検討－土器出現期の様相に関連して－」『信濃』第 30 巻第 4 号 信濃史学会
10）水ノ江和同 2009 「Ⅶ 九州地方の縄文集落と「縄文文化」」『シリーズ縄文集落の多様性Ⅰ 集落の変遷と地域性』 雄山閣
11）麻生 優 1985 『泉福寺洞穴発掘の記録』 築地書館
12）雨宮瑞生 1994「南九州縄文時代草創期土器編年－太目の隆帯文土器群から貝殻円筒系土器への変遷」『南九州縄文通信』№ 8 南九州縄文研究会
日高孝治 1999 「宮崎県における縄文時代草創期の様相」『鹿児島考古』第 33 号 鹿児島県考古学会
村上 昇 2007 「九州地域における縄文時代草創期土器編年－南九州地域を中心に－」『日本考古学』第 24 号 日本考古学協会
児玉健一郎 2008 「南九州隆帯文・爪形文土器」『総覧 縄文土器』 ㈱アムプロモーション など
13）註 1 に同じ
14）松本 茂 2003 「草創期～早期における諸問題（Ⅰ）－九州島南部の尖頭器を中心に－」『九州縄文早期研究ノート』第二号 九州縄文早期研究会
15）清武町教育委員会 2009 『清武上猪ノ原遺跡－ 2 －』清武町埋蔵文化財調査報告書第 25 集.
16）秋成雅博 2008 「南九州の縄文草創期の様相（宮崎県の縄文草創期概観）」『九州旧石器』第 12 号 九州旧石器文化研究会
及川 穣 2014 「日本列島における出現期の石鏃の型式変遷と広域連動」『物質文化』第 94 号 物質文化研究会
17）芝康次郎 2010 「縄文時代成立期における石器石材の利用の特質 －西北九州産石材の消費動向を中心に－」『先史学・考古学論究』Ⅴ（甲元眞之先生退任記念） 龍田考古会
18）遠部 慎 2007 「北部九州における撚糸文土器群と炭素 14 年代測定」『九州における縄文時代前葉の土器相』 九州縄文研究会
遠部 慎 2015 「南九州における押型文土器の炭素 14 年代測定」『貝殻文と押型文』 宮崎考古学会県南例会実行委員会
綿貫俊一 2008 「西南日本の無文土器」『総覧縄文土器』 ㈱アムプロモーション
乗畑光博 2015 「貝殻円筒形土器群の 14C 年代と較正暦年代」『貝殻文と押型文』 宮崎考古学会県南例会実行委員会
19）秋成雅博 2015 「船引地区遺跡群における縄文時代早期の石器の様相」『貝殻文と押型文』 宮崎考古学会県南例会実行委員会
20）註 7 に同じ
21）清武町教育委員会 2009 『五反畑遺跡 A 地区』清武町埋蔵文化財調査報告書第 28 集
22）柴田博子 2015 「第二節 九・十世紀の清武」『清武町史』 清武町合併特例区
23）宮崎県埋蔵文化財センター 2000 『白ヶ野第 3 遺跡 B 地区』宮崎県埋蔵文化財センター報告書第 23 集
24）清武町教育委員会 2008 『清武上猪ノ原遺跡－ 1 －』清武町埋蔵文化財調査報告書第 24 集

※【註】以外の参考文献については割愛させていただいた。ご容赦願いたい。